

◆連載-Vol.25

現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



執筆者プロフィール

中谷 正人 (なかたに・まさと)
1948 神奈川県生まれ。1971年千葉大学建築学科卒業、『住宅特集』『新建築』編集長を経て1994年からフリー編集者。1999年~2014年千葉大学客員教授。木の建築フォーラム理事、日本建築学会建築文化事業委員会幹事

現代建築の開拓者たちとその軌跡 7

大高正人 大地に根ざす

大高正人の代表作と言えば、我々の年代にとっては1967年の「坂出人工土地」であろう。今では「人工土地」などという言葉は「ピロティ」に置き換えられていて、かえって新鮮かもしれない。ル・コルビュジエが提唱したピロティと同様であろうが、ニュアンスとして違うのは、コルは建物自体を持ち上げて地面の開放を考えていたのに対し、人工土地は地表から持ち上げたスラブを地面とし、その上に建物を建てたことだ。だから歩道や広場をつくることができた。日本で人工土地を初めて具現化したのが大高だった。

もともと大高は、樹齢千年以上と言われる紅枝垂れ桜で有名な福島県三春町の出身。東京大学建築学科大学院を修了して前川國男建築事務所へ。ちょうど前川が木造軸組で「ブレモス住宅」に取り組んでいた頃である。

そして1960年には、その後の日本の建築界やデザイン界に多大な影響を与えた「世界デザイン会議」に出席していた。この会議を契機に川添登、菊竹清訓、粟津潔、黒川紀章、槇文彦らとメタボリズムグループを結成することになる。

数年前にもメタボリズムを再考する催し物があって反響を呼んだが、黒川だけがメタボリストではなく、これだけの建築家が参画していたのだ。もちろん、いろいろな事情で袂を分かった建築家も多かったが。

その後大高は「千葉県文化会館」(1968)、「栃木県議会棟庁舎」(1969)、「広島基町再開発」(1976)など大道を歩い

ている。なかでも「栃木県議会棟庁舎」のエントランスホールは大きな吹抜けで、PCのスレンダーな柱が印象的であった。

個々の建物から多摩ニュータウンなどの大規模な都市計画まで、幅広い活動が知られているが、一方で1962年には「農協農村計画」を構想、その後全国各地で農協施設を設計した。

いまほど流通が十分ではない社会状況では、生産者と消費者を結ぶために農協は重要な役割を果たした。大高は農協の重要性を理解していたのだ。そのことは「静岡県農協センター」(1971)の発表時に「農村と私」のタイトルで『新建築』に一文を掲載している。

その背後には大高が建築のテーマとして掲げた「PAU」というコンセプトがあった。P=Prefabrication、A=Art、U=Urbanismの略であり、都市のみならず農村にまで視野を広げた社会派としての姿勢がうかがえる。

蛇足ながら、Prefabricationは戦後の日本に決定的に不足していた住宅を大量に供給するために、建築家が取り組むべき重要な分野であった。すでに記したが60年代は住宅需要が爆発的に増加した時期であり、社会問題として多くの建築家が取り組んだ。彼らの多くは建築家として技術的な側面から課題を解決しようとした。ところが、消費財として開発された商品化住宅に太刀打ちできなかったのが現実であり、それは今でも続いている。

なお、「栃木県議会棟庁舎」を担当していたのが国場幸房であり、そのときの経験から生み出されたのが沖縄の「レジデンシャルホテルムーンビーチ」(1975)である。国場を含め、沖縄の建築家たちについては改めて記すことにする。

高橋T一 ざっくばらんで真摯

「T」と表記したのは、本来は青へんに光。これは『康熙字典』にしか記載されていない漢字で、星の光を表す文字である、ということをも本人から聞いた。実際に『康熙字典』にあたって確認したので間違いはない(20年ほど前、中国で買い求め、重く厚い本を担いで帰ってきたのだ)。しかし、パソコンの第二水準にも収録されていないため、印刷物になるときはすべて作字となる。傍迷惑な漢字ではある。

そこで、私の名簿には語呂合わせで「T一」としてあった。うかつにも年賀状を出すときにそのまま印刷して送ってしまったことがある。後になって気が付いて電話し、お詫びをしたところ、笑いながら「なるほど」と一言。ざっくばらんなお人

柄でありながら、建築に対しては一途に真剣な人であった。

1975年の『新建築』月評欄を担当したのが西澤文隆、高橋T一、宮脇檀、内藤廣の4人で、内藤はまだ早稲田大学の大学院生であった。

月評は雑誌だけを見て評論するというスタンスで始まった。その理由は、読者と同じ情報量でありながら、誌面からどれだけのことが読み取れるかという試みでもあった。ところが宮脇にとっては3回目の月評担当となり、見なければ書きたくないワガママを言い張った。これを編集長の馬場璋造が受け入れたため、毎月この4人と私の5人で、車であちこち走り回ることと相成った。

高橋の車に全員が同乗することが多かったが、道中、さまざまにプライベートな話も交わされ、高橋と宮脇、そして私は揃ってネズミ年、それもひと回りずつ違っていたことが分かり、それが縁となってその後も高橋とは言いたいことを言い合えるようになった。

何を以て高橋の代表作というかは難しい。もともと事務所に第一工房とう名称をつけ、個人ではないというスタンスをとってきたのだが、1966年の「浪速芸大(言大阪芸術大学)」のコンペで選ばれ、一躍有名となった。

初代理事長の塚本英世が、コンペの案を選んだのではなく、人を選んだといった話があり、高橋は20年間にわたってそれに応え続けた。そして「塚本英世記念館」(1981)の設計が終わるころ、「ザ・コンクリートだ!」といって誇らしげに言われたのだが、つつい「残念ながら、それは違う」と答えてしまった。

当然のことながら、「なぜだ!」と聞き返されたが、こちらも

はっきりと答えを持っていた。1978年の「帝都信用金庫芦花公園駅前支店」がそれである。延床面積900㎡足らずの小品であるが、これもRC打放しで量感のあるデザインとなっている。「塚本英世記念館」はこの延長上にあるのではないかという指摘に、高橋は黙り込んでしまった。

また、同様にこの延長上ともいえる「マガジンハウス」(1983)も量感のあるデザインで、見学した後、ジョン・レノンとオノ・ヨーコが来たという喫茶店でコーヒーを飲みながら、「どうだ、オレの作品は筋が通っているだろう」というので、またしても逆らってしまった。「いや、通ってない。なぜなら、大阪芸大の初期の建物群は木造の軸組を思わせるように柱が細く、軽快でシャープな印象を受けるけれど、最近の作品はボリューム感のほうが強い」。

これに対して、「そうか、やはり昔は通信の流れが残っていたんだな」と感慨深げに言っていたのが印象に残っている。高橋は東京大学第二工学部を卒業後、通信省営繕部設計課に勤務した経験があった。

残念ながらその時には言いそびれたが、素材の質感を大切にするという意味においては、まったく軸はぶれていない建築家であった。

亡くなる数年前、事務所を移転したのにまだ見てないだろう、という電話を受けて雨の中を尋ねた。そのとき、珍しく「そろそろ引退しようかな」と、ボンソツと言われたので、「あと4、5年は現役を続けてください」「なぜだ」「そうすれば日本の現役最長不倒距離をつくった村野藤吾さんを超すから」「そうか、それじゃあ頑張るか!」と答えていたが…、残念ながら叶わなかった。合掌。(続く)



坂出人工土地 撮影: MATO / ARCHI'RECORDS

大阪芸術大学塚本英世記念館 芸術情報センター
出典: H e T 大阪建築 (http://www.hetgallery.com/) 著作者: Hiromitsu Morimotoマガジンハウス
出典: ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)